

第五章

明柔会

伝統の支え

OBの熱情が原点

新目黒合宿所の建設

明柔会は柔道部との関わりの中でこれまで大、小の事業を行つてきただが、最大のものは十年前の創部九〇周年を記念した新目黒合宿所の建設であった。その際に見せたOBたちの後輩を思う熱情を顕彰する意味も含めて、改めてこれにふれてみたい。

平成六（一九九四）年、明柔会は大学当局の支援を得て老朽化した目黒合宿所を工費一億五千万円をかけて建て替えた。総工費のうち五千万円を大学が予算化し、一億円は明柔会が負担するという大事業であったが、結果的に全国OBの柔道部への思いと母校愛のおかげで無事完成した。予定を上回った拠金額のほぼ全額がOBからのものであつたことを特記しておきたい。

設備の完備した新合宿所の完成は、雨漏りを避けながらの生活を強いられた学生にとって大きな贈り物となつたが、彼らもこれに応えて、この十年間ますますの成績で頑張っている。

さて、この事業のみならず、現在、部の年間予算の大半はOBの年会費と寄付によつて賄われているのである。すなわち明大柔道部の伝統は、道場すなわち現役部員と明柔会の緊密な連帯と熱い母校愛によつて保持されているということである。

柔道に限らず、スポーツのすばらしさは勝負の結果にのみあるのではないことを十分に知りつつも、あえて言えば、創部百年を迎えた、あるいは間もなく迎えるいわゆる伝統校の柔道部で我々に匹敵する実績を残している大学はない。

ともあれ、我々は永年日本のスポーツ界をリードしてきた大学スポーツの歴史にいささかの足跡を残してこれたことを誇りに今後も精進を重ねていきたい。

道場にはいま、創部から現在までの部員一一五〇名の名札が掲げられている。その下でこれから部員たちが稽古着の襟を正し、明柔の新しい伝統と歴史を築いてくれる事を祈念する。

明柔会の創設と機関誌

昭和五（一九三〇）年発行の『明柔会々報』（第二号）によると、当時の会員は一四三名である。会計報告に、昭和四年度会費収入百八円（三十六名分）、第一回総会費用六十八円五十銭が計上されているので、明柔会の創設は昭和四年ということになるのであろうか。

ただし、昭和七年発行の『明柔会々報』（第三号）に、会員の小田常胤氏が、「明柔会が曲がりなりにも出来た」との感想文を寄せているので、継続性のある組織として足場を固めるまでには糾余曲折があつたと思われ、事務所の所在地も、東京府下の牧野政信方から、神田神保町の勅使河原己幸方、吉祥寺の鈴木潔治方へと転じている。

いずれにせよ、創設の当初から、明柔会は、現役の学生柔道部の活動を支援することを目指に掲げており、その精神が、現在に至るまで脈々と受け継がれている。

機関誌『明柔会々報』は、昭和十年頃までは休刊となり、長いブランクを経て戦後の昭和三十八年、四十三年の二回発行された。

現在の『明柔』が発刊されたのは、昭和五十七（一九八二）年で、以来、今日まで継続して刊行されている。

（文責・小林敏邦）

感想

一九二二年度卒

花桐清一郎

餘程以前から明柔會設立と云ふ事を考へては居た事で又是非早くやりたいと云ふ希望は充分満ちて居ながら却々横着な私は眞先に馳出してやると云ふ事の出來ない悪い癖があるのでたれか出て呉れないかとそればかり待て居た處が出るだらうと密に希望して居た人達が矢張り出来て發起者と成つてやつて呉れたので自分も之れ幸なるかなと飛び出して行つたと云ふ、誠にお恥かしい次第です兎に角明柔會の生れた事は實に心強い事で有つて母校發展の上から觀ても斯道の爲亦吾々明大柔道部に學んだ者や現學生柔道部員諸兄がどこ迄も團結して行く上から云ても大變結構な會であつて吾々はいつ迄も若き日の學生氣分であつて肉其のものは老ゆるとも氣力其のものがいつ迄も若くして元氣であるなれば無論攝生と云ふ大切なものを忘れなければ吾々の肉そのものも體に若返るものであると私は信じて居ります夫れで常に怠たらぬ心懸けは茲に云ふ迄もなく精神の修養之れが出來て居ないと本當に肉の柔道がどれだけ練ゑられて居ても心有る人から見らるゝ時はそれは或は柔道で

なく此の獸道と觀られる場合が多くあります。私はかと日常に私は心して居る事であります。私は講道館年中行事の寒稽古土用稽古此の二つの後者を歸國する關係上やらない事にして居ますが寒稽古丈けは十二三回貫して居ります卅日間の中怪我をして歩行困難の場合でも中途で坐折する事なく見學しながらでも卅日間皆勤する事にして居ります。之れは體を練ると云ふ事其のも

より精を練ると云ふ此の精は何者にも打勝つと云ふ吾々武道家の一一番大切な日常に心懸けて居なければならない事で有りますから、まあ。兎に角此際明柔會の生れたのを幸ひ吾々健兒たる者能く一致團結して國家社會並に明柔會發展の爲に會員諸兄が益々健全なる精神と肉體を以て進んで行かなければならぬのが此の會の目的であつて同時に指命で有る様に信ずるのであります。實際欣こばねばならない事は明柔會員には却々多數人格者諸兄の加つて居らるゝ事を會前途の爲に皆様と共に祝福する次第であります。

一、1、會報で全會員の近況と聲咳とに接し度い。

2、會報は年二回發刊して貰ひ度い。

會員に對する希望。現に會員の多くは若い人達ばかりなので會の事業を思ふ存分活動させる餘猶も資力もまだ不充分な爲めお互に何となく物足りなく感じて居りますが斯うした會の力に抱擁されて居ることがどんなに心強く生きてゆけることあります。

いくら丈夫な種子でも蒔かねば生えずまた時と所と手入とを必要といたします。

しかも幸にして種子を下ろした以上は各自に成育させてゆく義務と責任とを感じます。十年後か二十年か大地に確かりと根を下ろし大空に思ひの儘手を伸ばす明柔會の將來を楽しみつゝ

會員諸兄の御健闘を祈らせて いたゞきます。

一九一三年度卒 鈴木潔治

感想

注・明柔會々報 第三号（昭和七年）に寄せられた明柔會設立についての感想より。

○ 第三回明柔會總會

昭和五年四月五日（午後五時）

牧野政信君 村上哲夫君 山崎繁雄君
 新免伊祐君 滑川四郎君 中島慎君
 岩田吉雄君 和田二一君 柳茂行君
 花桐清二郎君 中島新一郎君

一、封筒（五百枚）原稿用紙（千枚）ヲ購入スルコト、
 一、昭和五年度春期總會開催ニ關スル件、
 （イ）期日 四月五日土曜日
 （ロ）場所 廣陽軒（京橋）
 （ハ）會費 金參圓也

○ 會合事務報告

昭和四年拾壹月 日、

母校柔道部ノ學生聯盟主催リーグ戰ニ出場ノ選手慰勞ノ爲メ玉子（金參圓也）ヲ贈呈ス。

（ト）招待者は學長、部長、三船先生ニ決定、

昭和五年 貳月 壱日、

母校柔道部卒業生送別會ニ招待を受ケ、小田常胤兄、鈴木潔治兄、村上哲夫兄、ノ三氏出席ス、

昭和五年 貳月 八日、

幹事協議會ニ於テ左ノ事項ヲ決定ス、

一、四年度會費集金ニ關スル件、

（イ）未納ノ會員諸兄ニ振替口座設置報告旁々之レヲ利用シテ御納入方歡誘ス

ハ幹事ニ於テ自辨ス、
 ハ幹事ニ於テ自辨ス、
 ハ幹事ニ於テ自辨ス、

（ロ）集金郵便ノ成績發表ハ第二號會報ニテ御納入諸兄ニ對シテ謝辞ヲ述ブ
 當日の出席者左の如し（順序不同）

光永善一君 坂本一角君 鈴木潔治君
 能美一夫君 八島輝徳君 島崎軍二君

一、明柔會代衣員牧野政信トシテ東京中央郵便局ニ振替口座ヲ設置、

幹事會ニ於テ事項ヲ決定ス、
 幹事會ニ於テ事項ヲ決定ス、

一、學生委員トノ接渉ニ關スル件、
(イ) 時日 三月二十日午後五時、
(ロ) 場所 新水(銀座二丁目)、
(ハ) 會費 金貳圓也 但シ幹事負擔、
一、駿臺新報及學報ニテ明柔會總會ヲ會員
諸兄ニ廣告掲載スルコト、
一、會員ノ吉凶ニ關シテハ當分ノ間文章ヲ
以テ爲ス、

一、明柔會總會ト會員難波清人氏坂本一角
氏ノ衆議院議員當選祝賀會トヲ兼不テ
開催スル事、
昭和五年 參月 拾五日
昭和四年度明柔會會費再請求書發送スルコ
ト、
昭和五年 參月 貳日
銀座薪水ニ於テ學生委員ト幹事トノ交換會
ニ於テ左ノ事項ヲ協議ス
一、母校道場内ニ卒業生ノ名札ヲ正確ニ訂
正掲載スルコト、
一、五月十八日開催決定ノ母校柔道大會ニ
審判員ヲ派スルコト、
一、學生聯盟ニ關シ其ノ向上發展ノ基礎ハ
組織ノ改全、公平ナル獨立、等々ナ
ルコトヲ協議ス、
一、學生トノ親睦ヲ一層濃厚ナラシムル意
味ニ於テ出來得ル丈ケ多クノ會員ノ

母校柔道部ヲ訪問サレタキ旨談合ス、
一、好時期ニ現部員ト先輩トノ懇親試合ヲ
舉行スルコト、
一、東京及近鄉在住諸兄ニハ出發時刻ヲ、
遠征地方ノ諸兄ニハ訪問、應援方ノ
依頼状發送ノ事、
昭和五年 五月 貳日
第三回春季大會(昭和五年度總會)ニ關ス
ル一切ノ件ヲ協議ス、
幹事會ニ於テ第二號明柔會會報編纂主任ヲ
牧野幹事ニ決定ス、
一、母校ニ於テ柔道大會ヲ舉行シ多數ノ會
員出席ナシ盛會、
昭和五年 六月 壱日
現部員及會員ノ懇親試合ニ六月七日舉行ス
ルコトニ決定、
昭和五年 六月 三日
一、東京近鄉在住ノ會員諸兄ニ懇親試合ニ
出場方歡誘ノ通知狀發送、
一、中島新一郎君ヲ母校柔道部關西遠征軍
監督トシテ當會ヨリ推選ヲ追認ス、
昭和五年 六月 七日
一、現部員ト會員トノ懇親的對抗柔道試合
ヲ舉行、

○ 會計報告

一、金 參百圓參錢也 總收入
一、金貳百六拾九圓拾五錢也 總支出
一、金 參拾圓八拾八錢也 差引殘高
收入內譯
一、回文ヲ發送スルコト、
一、明治大學體育俱樂部組織ニ關シ明柔會
ハ消極的態度ニ出ヅルコト、
金五拾七圓 昭和四年度會費參拾六名分

金九拾圓	第參回大會會費拾八名分
金四拾五圓	第參回大會會費拾五名分
金參錢	振替貯金利息 支出内譯
金 貳百參拾參圓參拾錢	事業費
金 參拾五圓八拾五錢	消耗品
事業費容	
第壹回總會費用	六拾八圓五拾錢
第二回大會費用	八拾參圓八拾錢
年賀狀	八拾錢
昭和四年度會報貳百部	參拾圓
第參回大會費	四拾八圓
第參回大會紀念攝影費	參 圓
消耗費容	
第壹回總會通信費	五圓貳拾錢
第貳回大會通信費	壹圓五拾錢
領收證貳冊	貳拾錢
集金郵便費用	四圓五拾錢
年賀郵便切手代	壹圓五拾錢
金錢出納簿壹帖	壹圓拾錢
明柔會印	壹圓六拾錢
學生聯盟出場選手見舞	參 圓
集金領收手數料	壹圓拾五錢
振替貯金拂込用紙貳冊	參拾錢
會合錄壹冊	七拾錢
振替集金用切手代	貳 圓

◎ 會 告

以上昭和五年五月一日 現在

金 拾圓 振替貯金基金貯入

金 貳拾圓八拾八錢 現 金
壹 圓

金 貳拾圓五拾錢 現 金
五 圓

第參回大會通信費 參圓拾錢

第參回大會案内状印刷費 貳 圓

原稿用紙貳千枚 振替口座設置ノ通知及集金費用 貳 圓

封筒五百枚 殘高内譯

壹 圓

○八八二番) を設置致しましたから會費其の他の事は御遠慮なく御利用下さい。
一、今年度分會費は甚だ勝手な様ですが出来得る丈け早やく御納入下され度、振替用紙は此の會報と同封致し居きました。

一、春季總會に於て昭和五年度より明柔會々費を年額金壹圓五拾錢也と變更決議致しました。

一、春季總會に於て幹事改選の結果左の如く前年度幹事重任に決定致しました。

幹 事 同 同 川上 忠君

同 同 山崎繁雄君

鈴木潔治君 八島輝徳君

(『明柔會々報』第二号)

一、大体に於て諸賢の御住所が判明致した様に思ひますが尚間違ひや御記入洩れがないとは限りませんから其の節は出來得る丈け御通知願ひます。

一、豫て御報告申上げました通り今年度(昭和五年度)から當會専用の振替口座(東京六

財會不況の折柄

當會の維持、發展と母校柔道部後援の爲め失禮ながら集金郵便を以て昭和四年度會費（一金參圓也）を頂戴にまかり出で候處、心よく御贊成御應徵被下れしに依つて逐次當會の目的に向つて行動致すことが出來居り候へば有難く感謝仕り候、當會の微弱なる行動に就ては事務報告及會計報告を御一覽被下度、一々領收と御禮を兼ね、書状にて御通知申上ぐ可き處なるが、色々取まざれ其機會を得ざりしことは申譯なく遺憾に存じ候。

只今會報紙上を拝借して、領收と御禮の御挨拶を兼ね益々目的に向つて進み度存じ候へば一層の御援助を賜はり度奉懇願候。

昭和五年十二月 明 柔 會
 (『明柔会々報』第一号)

金壹百四拾四圓
 昭和五、六年度會費四拾八名分

金拾 七 圓	臨時總會々費
金拾 八 圓	第四回總會々費
金參拾圓九拾八錢	前年度繰越金
金參拾壹圓八拾八錢	鈴木幹事へ内金トシテ返済
金拾圓五拾五錢	現 金
支出内譯	
金貳百拾壹圓參拾四錢	事業費
金九 圓 九 錢	消耗費
金壹 百 圓	鈴木幹事ヨリ借入金
事業内容	
昭和五年度會報	百四拾六圓參拾四錢
臨時總會費用	拾七圓
第四回總會費用	拾八圓
母校柔道部大阪方面還征ニ對スル土產	五 圓
母校紛擾ニ對スル費用	拾五圓
消耗費內容	
第四回總會案内其他	參 圓
會員學生紅白試合案内費	六拾錢
學生ノ大阪方面遠征案内費	壹 圓
學校事件報告ニ關スル費用	壹 圓
廻文督促費用	參圓四拾九錢
不足額内容	
收入内譯	
金六拾八圓四錢也	鈴木幹事ヨリ借入金
以上	昭和七年貳月貳拾日現在

會 則

一、本會ハ明柔會ト稱ス
一、本會ハ會員相互ノ睦親ヲ圖リ合セテ明治大學校柔道部ヲ後援スルヲ以テ目的トス
一、本會々會員ハ次ノ二種ノ會員ヲ以テ組織ス
正會員 明治大學柔道部員タリシ校友ヲ以テス
特別會員 本會ニ好意ヲ有スルモノ
一、本會ノ例會ハ春秋二回トシ必要アレバ臨時開會ス
一、本會ハ事務所ヲ左ニ置ク
東京府下吉祥寺町五九〇
鈴木潔治（電話吉祥寺三六〇）
一、本會ノ正會員ハ會費トシテ年額壹圓五十錢也ヲ納入スベシ（六月頃）
一、本會ハ幹事五名ヲ互選シ仕期一ヶ年トス但シ幹事重任ヲ妨ゲズ
一、本會ノ幹事ハ會務一切ヲ處理ス
一、本會ハ年一回會報ヲ發行シ會員ニ分布ス
一、本會ノ維持費ハ會費及其ノ他ヲ以テ之ニ充ツ
附則 本會ノ會則變更ハ例會ニ於ケル出席會員ノ三分ノ二以上ノ決議ニヨ

(『明柔会々報』第三号)

目黒新合宿所建設当時を偲ぶ

明柔会幹事長 高田誠之助



活動が始まつたのである。

早速、大学理事者との折衝に入つた訳だが、当然ながら、早々に具体案が示されるはずはない、総論賛成各論は検討の上で、という状況が一年以上続いた。ただ何回かの交渉のなかで、建設費用の三分の一を大学が持つという心証を得たので、先走りの感を持ちながらも、明柔会も全員に対する募金活動に入った。ただ心証を得たという段階であつたから、会員個々人への寄付要請はこの時点では押さえたが、この年の会報『明柔'90』は合宿所再建特集号となり、会員に対する趣意書、建設資金計画、納入方法、寄付金に対する税の優遇措置などについて詳細な記事を掲載した。

明柔会は現役学生の活動を支える大・小の事業を行つてきたが、最も大規模だつたのは創部九十周年を記念した新目黒合宿所の建設だつた。

旧目黒合宿所は昭和二十六（一九五二）年に開所し、以来四十五年間、多くの人材を育成してきました。しかし戦前に建てられた木造建築であるから平成に入りその老朽化は極まつた。

平成二（一九九〇）年二月、明柔会は建設推進の具體化に向けて「建設委員会」（会長・姿節雄、副会長・神田和夫、神永昭夫、事務局長・高田誠之助）を設置し、同年四月の明柔会総会に①建設委員名簿、②建設計画概要、③資金計画、④寄付金納入方法、に関する書簡を提示し承認を得た。合宿所再建に向けて明柔会の

設置し、各部の斬新的な整備計画案を作成中である。柔道部の合宿所建設費の件については平成二年からの要望であることから先行して推めており、具体案については別紙に述べている通り云々」という説明書が添付されていた。

この回答を得た時の安堵感、そして姿先生を囲んで飲んだビールの味は忘れられない。

委員会は早速用意していた設計書を基に予算の見直し作業に入り、最終的に総工費一億五千円と試算し、年も押し迫つた十二月二十六日、筒井総務理事に試算の明細書を提出した。

明けて、二月二日、遂に吉報がもたらされた。二月一日の理事会で、工費の三分の一、五千万円の大学負担、及び税の優遇措置が決定されたのである。また同時に寄付金の取り扱い方についての説明があつた。建設委員会が平成二年二月に発足して以来、三年目のことであった。

この間、先行していたO.Bへの募金活動は進み、拠金はすでに七千万円に達していた。

寄付金申込みの連絡を受ける都度、柔道部を愛する各位の志に胸を熱くしたものである。

しかし一方、目黒の現場では着工に伴う問題が生じていた。これは「周辺住民の了解を得た上で工事に入るよう」にという区の指導によるものである。自分たちの住まいが古くなつたので同地に建築基準法に基づいた新居を建てる、

という事に問題はなかろうと思つていたので、この対応には戸惑つた。そして、瑣末な問題のフレーム、いうならば利己主義者との対応に大いにエネルギーと時間を費やしてしまつた。

ともあれ担当委員の努力でこのいわば難雑事も表面化せずに治まり、地鎮祭にこぎつけた。

創部九十周年を迎えた平成七年一月、明大柔道部を愛する明柔会員の志と大学当局の協力による新合宿所が現代的な設備を伴つて完成したのである。

事業推進の文字通り柱となつて活動された姿節雄先生、その先生が逝かれて今年は七回忌にあたる。先生は明柔会会长、柔道部師範として、明治大学柔道部の象徴であつた。

創部百年を迎えていま、我々は先生の柔道に対する理想、志、そしてその教えを改めてかみしめ、今後の発展に尽力して行きたい。

明柔会合宿所建設委員

顧問

百瀬 恵夫

(明大政経学部長、柔道部長)

高橋 喜久

(株) ソーダニッカ相談役

委員長

姿 節雄 (昭和十六年)

副委員長 神田和夫 (昭和二十六年)

大国伸夫 (昭和三十七年)

関 勝治 (昭和三十九年)

神永昭夫 (昭和三十三年)

村井正芳 (昭和三十九年)

渡辺政雄 (昭和二十九年)

鳥海又五郎 (昭和三十九年)

渡辺欣嗣 (昭和二十九年)

湯浅政一 (昭和四十二年)

押切義春 (昭和二十九年)

北瀬暁一 (昭和四十二年)

神永昭夫 (死亡につき空席)

中野一郎 (昭和四十二年)

福田二朗 (昭和三十三年)

坪 昭二 (茗水クラブ)

篠巻政利 (昭和四十三年)

中島平人 (昭和四十四年)

水野留次郎 (昭和二十四年)

上村春樹 (昭和四十七年)

宮下光男 (昭和二十七年)

原 吉美 (昭和四十九年)

渡辺欣嗣 (昭和二十九年)

丸谷武久 (昭和五十年)

押切義春 (昭和二十九年)

加瀬次郎 (昭和五十一年)

今 松夫 (昭和二十九年)

山内鉄生 (昭和五十三年)

工藤欣一 (昭和二十九年)

栗原三千男 (昭和五十四年)

高田喜之 (昭和三十年)

藤原敬生 (昭和五十五年)

伊藤義一 (昭和三十年)

重松裕之 (昭和五十七年)

丸山彰治 (昭和三十一年)

吉田尚生 (昭和五十七年)

野田健次郎 (昭和三十二年)

朝飛 大 (昭和五十九年)

福田二朗 (昭和三十三年)

千葉宏之 (昭和五十八年)

小川登志雄 (昭和三十三年)

小川直也 (平成二年)

宮下 潔 (昭和三十三年)

石田輝也 (平成三年)

鳴海誠一 (昭和三十四年)

吉田秀彦 (平成四年)

田中章雄 (昭和三十六年)

畠田道夫 (昭和三十六年)

杉原 構 (昭和三十七年)

事務局長

高田誠之助 (昭和三十六年)

事務局

小林敏邦（昭和三十三年）	篠巻政利（昭和四十三年）
杉原 構	中島平人（昭和四十四年）
代田正俊（昭和四十四年）	西村良之（昭和四十五年）
濱本義典（昭和五十一年）	河原月夫（昭和四十六年）
入江秀明（昭和五十三年）	上村春樹（昭和四十七年）
重松裕之	鳥海又八郎（昭和四十八年）
渡辺英明（昭和六十三年）	原 吉実（昭和五十年）
	小野瀬雅幸（昭和五十一年）
	浜本義典（昭和五十一年）
神田和夫（～昭和二十六年）	段上道夫（昭和五十二年）
伊澤 潔（昭和二十七、二十八年）	栗原三千男（昭和五十四年）
工藤欣一（昭和二十九年）	藤原敬生（昭和五十五年）
高田喜之（昭和三十年）	植田 茂（昭和五十六年）
丸山彰治（昭和三十一年）	小山賢司（昭和五十七年）
野田健次郎（昭和三十二年）	千葉宏之（昭和五十八年）
小川登志雄（昭和三十三年）	朝飛 大（昭和五十九年）
渡辺邦雄（昭和三十四年）	竹園隆浩（昭和六十年）
小林忠吉（昭和三十五年）	長谷川 敦（昭和六十一年）
田中章雄（昭和三十七年）	渡辺英明（昭和六十二年）
杉原 構（昭和三十七年）	小林 誉（昭和六十三年）
細川隆夫（昭和三十八年）	小川直也（平成元年）
関 勝治（昭和三十九年）	石田輝也（平成二年）
佐々木 満（昭和四十年）	吉田秀彦（平成三年）
渡辺公雄（昭和四十一年）	秀島大介（平成四年）
湯浅政一（昭和四十二年）	

卒業年次別責任者（請求担当）

篠巻政利（昭和四十三年）
中島平人（昭和四十四年）
西村良之（昭和四十五年）
河原月夫（昭和四十六年）
上村春樹（昭和四十七年）
鳥海又八郎（昭和四十八年）
原 吉実（昭和五十年）
小野瀬雅幸（昭和五十一年）
浜本義典（昭和五十一年）

伝統を守るOBの熱意と愛情

明柔会事務局長 濱本義典

学生時代からマネージャーをしていた私が事務局として明柔会に携わってきたこの二十年間、最も大きな事業は目黒合宿所の建設事業でした。大学との折衝、近隣住民との折衝、費用の問題、様々な問題がクリアされ目黒新合宿所が完成したのは十年前です。

この時には、それぞれの役割で事に当たられた幹事諸先輩のエネルギーに感服いたしました。そして全国のOBから一億円という醸金が寄せられた事にOB各位の明大柔道部に対する愛情と熱意を改めて強く感じました。

最近十年では、奨学金事業、小川町道場の移転、一〇号館新道場完成が大きな出来事といえます。また、幹事会などで議題に上ることが多いのが、明大柔道部の財政問題です。古くから明大柔道部の財政面は明柔会によって支えられて來たといつても過言ではありません。柔道部に対する明柔会本会計からの支出割合は七割以上に達し、奨学金なども含めると相当な費用が柔道部のために使われております。

この数年、百瀬先生の学内でのご尽力により、

大学当局の体育会に対する視点が明らかに変わりつつあります。すなわち、大学による有望体育会学生に対する奨学金制度の創設、体育推薦入試制度の改定、優秀な部に対する助成金の支出などです。柔道部もその恩恵に預かっておりますが、他大学と比べるとまだ十分とはいません。もちろん、競技実力の強化は金銭だけで解決できる問題ではありません。しかし重要な要素である事は確かです。これから柔道部の歴史と伝統、実力を更に後世につなげていくためには避けて通れない問題と愚考します。

そして何よりも柔道部の永続的な発展のためには、学生の教育も重要な課題です。世の中の変化は柔道部学生にも大きな影響を与えていました。時代の流れだからと看過していくは、せつかくの百年の歴史と栄光も数年の間には小さな灯火となりやがては消え去ってしまうでしょう。柔道部とOB会が一体となつた対策立案と実践が大切と考えます。全国OBの変わらぬご支援とご協力をお願ひいたします。

奨学金委員会より

奨学金委員会委員長 杉原 構

明柔会奨学金事業は平成十四年度は、貸与を

含め十名の学生に奨学金を支給する事が出来た。奨学金事業の意義を深く理解され多大の寄付をして頂いた篤志会員各位にまず以て感謝である。

過去にもこの支援がなければ現在柔道界で活躍している明柔選手の多くは柔道着に違う大学の校章を付けていたかも分からぬ。

しかし、昨今の厳しい経済環境の中で、篤志会員の浄財に頼るだけの奨学金事業は早晚行き詰まるだろう。

本来奨学金は、明治大学柔道部に入學を希望し、実力有望でなおかつ家庭的、財政的に恵まれない者に対しその事情を考慮して幹事会の承認のもと給付せられるものである。全てとは言わないが、現在では、有望高校生のスカウトの際、他大学との競争に負けないための条件の側面もある。明治の実力を維持し、多くの先輩が培ってきた伝統を守るためにいたし方のない事かも知れない。忸怩たる思いだ。ただ明治は勝たなければという思いはOB一人一人共通だろう。

大学当局は、体育会の学生に対し一定の条件をクリアすれば奨学金を支給する制度を二年前から発足させた。大学の広告塔としての体育会の役割を認識し始めたところと見受けられる。

但し支給される人数は体育会全体（四十一部）

で五十名に満たない。この制度がさらに拡充されれば明柔会の財政は随分と助かる事になる。

いずれにしても今後数年の中に昭和五十年代、六十年代そして平成のOBをさらに啓発し

世代交代の実を上げて行きたい。

これから明柔百年を見据えて…。



新黒合宿所

各地の明柔会だより

・歴代明柔会員

十四年）豊田自動織機、鈴木正（昭五十五年）豊田自動織機、壇上治享（昭六十年）新日本製鉄、と相当数のOB諸氏がいる。

しかし、平成五年一月に永年にわたり愛知明柔会の会長として、会を取り仕切っていた永井佑治氏が急逝され、その後任会長として伊藤彰朗氏が平成十五年までの十年間、永井氏に勝るとも劣らない卓越した手腕を發揮され、会を運営されたのですが、若干体調を崩されたこともあり、小生にとつては重責ではあります、伊藤会長の命によりその後を受け継いでおりま

明柔会東海支部

東海明柔会会長 河原月夫

まずは、お断りをしたい。明柔会愛知支部は昭和四十一年発足しましたが、正式な規約とか会員名簿がないため、したがって私が、知り得ている先輩諸氏の記憶を辿りながら記述します。失礼があればお許し願います。

明柔の愛知県出身者には、種井育三（昭二十五年）、小野寺文雄（昭二十五年）自営、永井佑治（昭三十二年）、伊藤彰朗（昭三十三年）会社会長、榎本正（昭三十五年）会社社長、河原月夫（昭四十六年）愛知県警、中村博之（昭四十九年）三菱重工、谷口淳（昭五十四年）愛知県警、山田章弘（昭五十六年）愛知県警、古田勝久（昭六十二年）、石田輝也（平二年）高校教員、河原龍秀（平七年）柔整教員、宮城（平十三年）愛知県警、沢田（平十四年）警備会社、の各氏がおられる。

また愛知県在住者としては、渡辺健二（昭四

三）年にニュージャパン柔道協会に入門してからです。当時大阪には、明大柔道部OBで浜野正平、吉田光夫、小田原徳善、城戸勝守、秋岡高などの諸先輩がおられました。しかし、中心はなんといつても浜野先生です。

先生は、戦後西の講道館と言われたニュージャパン柔道協会を当時のアメリカ進駐軍のヘリコプト司令官と直談判し、土地を提供してもらい設立されました。焼野原となつた大阪を柔道をもつて立直らせるべく熱意をもつて折衝されたのです。浜野先生は幾多の柔道人を育てられ日本柔道の発展に偉大な足跡を残されたのは衆人の知るところです。

浜野先生の推薦で大阪から明大柔道部へ受験した者も数多くいましたが、当時は明大の選手が強すぎたので他の大学を選んだ者もおりました。浜野先生のよく言わることは、我が名門「明治大学」は単科大学（柔道専門）ではない「総合大学」である、文武両道を忘れてはならないということでした。

ニュージャパン柔道協会より浜野先生の推薦で山崎富士雄、比嘉良幸、大橋武彦が入学し、小田原徳明、金城孝治とあわせ、以上の五人は小田原徳善先生と親しかった鶴見栄八先生の澄水園にお世話をになりました。合宿所組は向下文治郎、川村侃、金谷洋志、藤鷹浩一郎、日田孝

大阪明柔会の歩み

大阪明柔会会長 大橋武彦

私が柔道を始めたのは、昭和二十八（一九五

志、藤鷹英雄、岡田彰久、金谷允道、金本卓、岡本計、以上が大阪府出身です。

大阪府近県の出身は兵庫県が坂本行弘、城洲（坂本）司郎、坂本洲正、蓬萊敬、木下剛至、山田広治、川本俊成、進藤庄次、京都府が山本忠夫、寺居高志。和歌山県が藤戸優治、滝堀竜男（平三）。

昭和二十六年学生柔道復活後、全日本学生柔道東西対抗大会と全日本学生柔道選手権が二十七、二十八年はなんばの大坂球場で行われました。二十九年より大阪府立体育館で開催されておりました。

大会が終った後、浜野、葉山、姿先生を囲み浜野先生の試合の絶妙な講評をうけ和氣あいあいに明柔会が開かれておりました。三十年代頃の出場選手は七名、応援見学者五、七名でしたが、現在は総数三十余名を超えるようになつています。

大阪明柔会として現在の様な形で動き出したのは比嘉さんを中心に大橋、小田原、金城の四人が揃つた頃からありました。

個人選手権では金子、曾根、末木、石橋、神永、重松、朝田が優勝、昭和三十八年より体重別になつても個人優勝は当然の様に明大より多数出ました。東西対抗でも当然明大の実力を見せ付け大活躍でしたが、東西対抗は昭和五十二

年に中止になりました。東軍が常勝でしたので打倒東軍を目指していた西軍の連中は非常に残念がつておりました。

大阪の大会での印象的なことは明治が団体優勝出来なかつた頃、選手が加瀬次郎ひとりしか出場出来なかつたことには驚きました。あの強い明治はどうなつたんだと。しかし一人で来て優勝してくれたことは感無量でした。

昭和六十一年の選手権で小川直也が関根英之（東海大）との一年生対決になり決勝戦で優勝したとき、全柔連との対立で反対派の学生が表彰式に出席せず淋しい表彰式になつたことは誠に残念でした。

平成十二年より全日本学生体重別団体優勝大会が尼崎市記念公園体育館で開催される様になり、第二回大会に我が明治が優勝！ 大阪で久し振りに学生や応援のOBと美酒に酔いました。

九州明柔会から

九州明柔会会長 神永正夫

私は昭和三十六（一九六一）年度の卒業で、会兼明柔会を大阪で出来ることを誇りにし、学生のためと真心を込めて歓迎しているのです。

大阪で歓迎をうけ卒業後、学生や後輩にお返しをしてやつてもらえば良いと思つています。

さて、大阪からは東京の大学へ行く者が少ないと、転勤での移動もありますが、當時の大

阪在席者人数は約二十名前後です。在阪したOBはJRAの畠田、関、姿の諸氏他、世長絢一が平成十年から約五年在阪し必ず学生の応援に来てくれました。近年では竹園隆浩が朝日新聞大阪のデスクとして二年余在阪し実業柔道連盟や柔道の記事も書いてくれ活躍しました。神永洋一は金沢から昨年二度目の大阪へ、川本俊成も東京から帰つて来ました。

稻田OBは宝塚在、鈴尾OBは高槻在→単身東京勤務しております。

他県出身で現在大阪近辺のOBは、中野龍登、徳山操、甲斐福男、大村至、朝田紀明、栗原英道、佐々木充行、丸谷武久、稻田寿郎、鈴尾弘幸、富士井義文、神永洋一、中野博之です。

OBはJRAの畠田、関、姿の諸氏他、世長絢一が平成十年から約五年在阪し必ず学生の応援に来てくれました。近年では竹園隆浩が朝日新聞大阪のデスクとして二年余在阪し実業柔道連盟や柔道の記事も書いてくれ活躍しました。神永洋一は金沢から昨年二度目の大阪へ、川本俊成も東京から帰つて来ました。

た。しかし、明柔の末席に連なることが出来、兄から学んだ「ものを成し遂げるには我慢がいる。耐え難い痛みでも耐えねばならないこともある」「勝負は負けた時から始まる。弱さを知った時、己の成長が始まる」などの教訓は、明柔の諸先輩との厳しい練習の中で学んだ他の多くのことどもと共に、私の人生の貴重な指針となりました。

九州明柔会は、初代会長石橋弥一郎先生の発案で発足しました。戦後の大学柔道復興に尽力された古賀愛人先輩は、八十二歳のいまなお現役で、最高顧問として活躍されています。会員は総勢七十六名。例年、九州で開催される全日本選抜体重別選手権を機に懇親会を兼ねて明柔会の総会を開催しています。

九州の明柔から全国を制する人材が輩出することを願つて、これからも後輩学生に対する指導、支援に九州明柔会としても微力を尽くしたいと思います。

歴代明柔会員（卒業年度別）

明治四十四年	福田常雄	十一年	郎、橋本猛生、渡辺良治、本田誠之
大正二年	大西俊明、難波清人	川上忠、鈴木潔治、鈴江吉一、	
三年	多田利吉	鈴木香都良、難波徹、林純道、八島輝徳、出口林次郎	
四年		細江鶴之助、小野直治、木谷順一、佐々木良七、佐藤良雄、繩田喜美雄、浜崎五郎、村松靖、	
五年	新免純武、水島義高	伊藤静、今井春吉、生井喜一、	
六年	村岡春治、下川慶雄、吉田安	住吉栄一、服部倉三郎	
七年		大島覚、奥田実、川村克乎、	
八年	沢辺政吉、立元英二、萩原準、	藤原薰、藤本浩草、俣野健次、	
九年	平、宮地七郎、鈴木誠則、大原鹿雄	山本兼幹	
十年	五十嵐喜三郎、大木仁七、高木重孝、徳地清次、穂積大蔵、光永善一、吉田市郎平、鷺尾純一	秋山茂、朝比奈芳郎、大黒弼二郎、小田常胤、大野定吉、鎌田久真男、川金筆吉、川畑清一郎、川又務、佐久間弥太郎、島崎軍二、田村保輔、中浜直治、滑川四郎、橋本一雄、浜口茂三郎、藤田保治、本田健太郎、福井俊郎、松岡千之、山口清、	
昭和元年	梅園秀松、尾崎東、金丸英吉郎、葛西鋼一、酒井忠治、牧野政信、溝口重雄、毛利裕、若松栄明、吉田光夫、小西薰	山崎繁雄、能美一夫	
二年	大田昌雄、鈴木敬寿、多田通、田中久雄、畠中勁、花桐清二	井上文雄、大野大養、入江秀晃、岩田吉雄、栗本経輔、中島真、沼倉正、堀内賢三、八広定	
三年	石田幸三郎、市川甚三郎、入江松次、海野仁、長浜玄彦、本名源右衛門、柳茂行、齊藤憲	石田幸三郎、市川甚三郎、入江	

九年	治、伊藤哲郎、五十嵐元春、藤平 武、飯田 豊、河内山瑞彦、古賀芳蔵、坂本一角、伴 哲夫、村松悟久	善、片野英一郎、倉恒正行、古賀治郎、小林外喜雄、桜井太一郎、坂田 稔、篠原尚清、住田修藏、田島正男、田辺正衛、永戸清雄、西田東生、江口剛三、	十五年 沼口三郎、荒川廣司、法亢保晴城戸勝守、御園進、宮島竜治、中川 力、小野大見、草壁宏雄、黒木典行、佐藤春生、高橋 康、根本 立
四年	荒木延寿、太田 寛、大野正養、長田義夫、岡田梅男、倉田利一郎、小島鞆柴、佐々木義茂、滝川一益、三浦恒乙、堀端狩夫、和久井弘重、和田二一、山口義夫、林 道夫	大古田渡一、加賀田四郎、鹿毛善光、田中一郎、平本 仁、室賀新七、染谷 栄	十年 松田滋夫、浦川伊兵衛、大沢義郎、大田忠次郎、金 栄一、尾西信義、加藤西蔵、田口幸二、竹田 博、永森茂作、西山満州、長谷川 佐、古川信寿、保科永四郎、福田正利、宗像中入、村田博愛、福田 翼
六年	緒方志好、桑原小十郎、斎藤汲、篠山貞雄、杉町仁市、田畑光采、中島新一郎、根本義夫、松田良三郎、浅古半兵衛	七年 池田憲一、芋川正美、植田正次、神谷三平、武内五平、富田 盛、本間孝彦、吉田 正、高橋清一、飯野 晃、上田 正、植田咲治、海原正躬、河野芳男、木村忠一郎、金世 神、重倉政雄、外岡忠、中川 豊、中原義人、林一雄、齊藤政雄、宇田武司	十一 年 渡辺慶助、三玉 寛、杉山 孝、鈴木利雄、田沢文雄、華嶽富士雄、葉山三郎、宮川東悟、村山要、山岸靖直、鳥海又一郎、徳中康満、田口卓爾、工藤勝太郎、坂田留吉
八年	村上次郎、三塚彦夫、佐藤幸雄、許斐氏利、小熊英二	十三年 友部智一、宮川周蔵、大神恒文、石橋 敏、向山安雄、鈴木正郎、金子 操、馬場光治、高橋喜久、長田節彦、福田重夫、坂本 清、	十七年 浜 敏雄、余越政美、石田幸明、佐藤 茂、田中道則、井上市三郎、田渕裕己、松橋広司、東条三郎
十二年	川口一郎、小野孝一、稻富 弘、大崎六郎、山口吉暉、高橋秀豪、伊藤正雄、大田良知、鍵山宣信、石橋弥一郎、坂本義孝	十九年 田部富蔵、遠藤 一、小野俊男、秋輪 正、荒武三郎、田中良之、唐沢邦光、篠田 武、岩田 正、	十八年 三船芳郎、久米 勝、斎藤雅夫、伊藤正雄、大田良知、鍵山宣信、石橋弥一郎、坂本義孝

吉田一夫、吉村正平、大西賢一郎	昇、重信安泰、松岡義隆、長田邦、宮下潔、高島正美、森田次男、石井暢、浜野主哉、中村光明、三吉隆憲、石井勢祐、大輪小次、稻木茂男、屋嘉弘一、勝峯孝文
山肩敏美	田喜之、小野実、塙見泰之、桑田武司、伊藤義一、林徳美、大池小鉄、松岡篤、屋嘉弘一
守谷利雄	古賀愛人、青木清正、山崎昌徳、橘高良美、宮下悦男、近藤一、石神久寿三、細井茂
二十四年 堀口武、金谷久、宮崎博通、水野留次郎、吉益弘蒸	二十四年 堀口武、金谷久、宮崎博通、水野留次郎、吉益弘蒸
二十五年 伊藤信夫、隱居忠夫、中山四郎、種井育三、小川照春、相田正明、長山大乗	二十五年 伊藤信夫、隱居忠夫、中山四郎、種井育三、小川照春、相田正明、長山大乗
二十六年 金子泰興、神田和夫、池田昭二、小野寺文雄	二十六年 金子泰興、神田和夫、池田昭二、小野寺文雄
二十七年 曾根康治、須藤重男、門屋賢悟、大野忠博、永井藤成、伊沢潔、三宅秀男、長谷川幸夫、原弘二郎、菅原雄二、宮下光男、山田浩三	二十七年 曾根康治、須藤重男、門屋賢悟、大野忠博、永井藤成、伊沢潔、三宅秀男、長谷川幸夫、原弘二郎、菅原雄二、宮下光男、山田浩三
二十八年 小林久繁、末木茂、高橋良輔	二十八年 小林久繁、末木茂、高橋良輔
二十九年 山尾英三、押切義春、渡辺政雄、渡辺欣嗣、河辺一彦、岩崎勇、工藤欣一、安藤健三、今川村傑也、長谷川敏夫	二十九年 山尾英三、押切義春、渡辺政雄、渡辺欣嗣、河辺一彦、岩崎勇、工藤欣一、安藤健三、今川村傑也、長谷川敏夫
三十年 石橋毅次郎、中野竜登、小林	三十年 石橋毅次郎、中野竜登、小林
三十一年 安達秀則、小林基甫、鈴木章繼、高村秀翁、浅野鉄郎、山崎富士雄、丸山彰治、磯有志郎、本間竜吉、佐藤滿藏、新井重之、五島光、波多江健一、杉山澄雄、滝本満治、大須賀将郎、落合俊保	三十一年 安達秀則、小林基甫、鈴木章繼、高村秀翁、浅野鉄郎、山崎富士雄、丸山彰治、磯有志郎、本間竜吉、佐藤滿藏、新井重之、五島光、波多江健一、杉山澄雄、滝本満治、大須賀将郎、落合俊保
三十二年 永井祐治、徳永三幸、町山光良、野田健次郎、兼定正明、長谷川博行、坂井良司、池田仁大、酒井正雄、槙恵、藤井洋二、斎藤夫美雄、塚本勝人、久永峻、立元昌、石崎靖彦、中田健次、鶴田三千、鶴沢俊康、斎藤信明、宇野茂夫、黒川茂、新谷進、伊藤賢次郎	三十二年 永井祐治、徳永三幸、町山光良、野田健次郎、兼定正明、長谷川博行、坂井良司、池田仁大、酒井正雄、槙恵、藤井洋二、斎藤夫美雄、塚本勝人、久永峻、立元昌、石崎靖彦、中田健次、鶴田三千、鶴沢俊康、斎藤信明、宇野茂夫、黒川茂、新谷進、伊藤賢次郎
三十三年 神永昭夫、徳山操、小川登志	三十三年 神永昭夫、徳山操、小川登志
三十六年 田中章雄、高田誠之助、塙崎英一、大林貞人、松本順吉、佐藤治、田村浩志、佐々木義宣、畠田道夫、佐藤栄吾、神永正夫、木下征彦、岡部勝人、早瀬勝義、渡谷正久、篠田芳昌、向井範宗	三十六年 田中章雄、高田誠之助、塙崎英一、大林貞人、松本順吉、佐藤治、田村浩志、佐々木義宣、畠田道夫、佐藤栄吾、神永正夫、木下征彦、岡部勝人、早瀬勝義、渡谷正久、篠田芳昌、向井範宗

三十七年	神屋興介、田村興靖、酒井 知、 山崎忠男、佐藤正武、村木 純、 杉原 構、相川 智、内藤 進、 堤 繁、朝田紀明、大国伸夫、 前田拓雄、町山良行、幕田兼男、 大川 正、石本義明、栗田和明、 春日邦人、小林芳昭、栗原英道、 宝地戸幸夫、馬場 淳、古賀悠 田秀明、菅原隆三郎	四十年	坂良雄 上野武則、富田弘美、佐々木満、 坂本羯正、姥名達二、隅田一雄、 木原正勝、中島今朝光、法元保 孝、段上雄二、辛島雄健、小林 伸毅、高橋久雄、小藤田勝彦、 横山正弘、山下弘昌	四十六年	上野武則、吉沢修一、橋本一郎、 平沢保夫、西村良之、石井康男、 石橋重則 河原月夫、岩田久和、青木則雄、 梶原博見、馬庭光伸、利宗一、 金谷洋志、石橋広一、香川景政、 鈴木 強、浦上宗治、星野治ひ ろ、近藤孝徳、鈴尾貢好、新家	四十七年	國安教善、吉沢修一、橋本一郎、 平沢保夫、西村良之、石井康男、 石橋重則 河原月夫、岩田久和、青木則雄、 梶原博見、馬庭光伸、利宗一、 金谷洋志、石橋広一、香川景政、 鈴木 強、浦上宗治、星野治ひ ろ、近藤孝徳、鈴尾貢好、新家		
三十八年	上田隆三、平岡康司、佐々木晃、 鈴木紀一、佐藤幸二、石原賢信、 内村省藏、細川隆夫、池田建次、 渡辺 治、菊地 達、大村勝利、 池田二郎、鳴海憲二、北村晋太 郎、奥田新八、岩戸正美、菅谷 邦正	四十二年	山本裕洋、平田義昭、遠田照明、 佐々木充行、市島大二郎、古浜 晴永、藤林義高、渡辺公雄、堤 昭輝、小川洋一	四十八年	鮫島 俊隆、上村春樹、川口孝 夫、吉井敬吉、加茂博久仁、重 松義成、奥田輝重、岩崎治泰、 佐々木和吉	四十九年	吉永浩一、飯塚 栄、薦田茂久、 田辺敬三、大谷勝広、鈴木敬三、 渡辺光洋、加藤木祐司、鳥海又 八郎、松田幸次		
三十九年	関 勝治、坂口征二、山本忠夫、 村井正芳、植草 勝、田村忠勇、 中谷雄英、永吉勝憲、高岡念治、 鳥海又五郎、村山秀之、世良紘 一、飛島義絃、大西啓毫、中野 雅博、渡辺昌照、橋本登志満、 松田勲勇、長井利夫、向下文治 郎、野村守彦、鈴木愛忠、松田 良和、飯田弘昌、坂本州正、野	四十三年	太田正人、高田耕一、高木 別、 黒田基行、葉山義光、南 日和 郎、高林慎一、竹原弘志	四十四年	須磨周司、小谷利夫、姿 信夫、 小林欣吾、川村 侃、沼尾啓一、 宮崎照満、代田正俊、佐藤康夫、 中島平人、金子淑夫、村上京杉、 渡辺健一、星野泰之	五十年	原 吉実、中村博之、蓬萊 敬、 山肩 登、安田銀台、茂木康男、 菊地毅司、大谷俊夫、千葉 剛 石井成生、近藤右一、西村武彦、 市原弘一、小野瀬雅幸、大熊長 年、飯塚 明	五十五年	国安教善、吉沢修一、橋本一郎、 平沢保夫、西村良之、石井康男、 石橋重則 河原月夫、岩田久和、青木則雄、 梶原博見、馬庭光伸、利宗一、 金谷洋志、石橋広一、香川景政、 鈴木 強、浦上宗治、星野治ひ ろ、近藤孝徳、鈴尾貢好、新家
五十年	大村将司、高橋 博、佐藤高司、								

五十九年	朝飛 大、今堀浩之、大嶋貴志、	三年	矢作和久、斎藤峰章、青野浩三、	四年	海堀竜男、桑嶋 渡、莊司泰博
	吉田 毅		富士井義文、日田孝志、古賀智、早坂久永、木村忠光、三石秀司	秀島大介、大瀧賢司、鈴木知之、鉢谷幸弘、甲斐 親、清水裕二、町山成信、神永洋一	
五十二年	諏訪 剛、水嶋和則、清水敏雄、岩田克之、柳田明雄、井上恭夫、段上道夫、工藤則彦		五十三年	五十四年	五十五年
	栗原三千男、松村孝明、谷口淳、田中和美、清崎威朗、滝沢良、中尾保裕、佐藤忠司、河田惠吾		栗原三千男、松村孝明、谷口淳、田中和美、清崎威朗、滝沢良、中尾保裕、佐藤忠司、河田惠吾	薦田文明、藤原敬生、広瀬徳和、鈴木 正、安川寛道、栗田勝治	薦田文明、藤原敬生、広瀬徳和、鈴木 正、安川寛道、栗田勝治
五十六年	一澤秀明、古川誠也、中川隆之、田原聖也、金子泰夫、植田 茂、加藤良人、山田章弘、滝本英之		五十七年	五十八年	五十九年
	藤戸優治、斎藤剛生、藤本一博、山内秀人、森園文成、小山賢司、亀村泰司、木下剛至、重松裕之、吉田尚生、佐藤恵生、正司直樹		藤鷹英雄、工藤頼康、本間一義、古田勝久、辻 純一、早田 豊、那須一郎、橋本年弘、中口光一郎、向井一輝	藤鷹英雄、工藤頼康、本間一義、古田勝久、辻 純一、早田 豊、那須一郎、橋本年弘、中口光一郎、向井一輝	藤鷹英雄、工藤頼康、本間一義、古田勝久、辻 純一、早田 豊、那須一郎、橋本年弘、中口光一郎、向井一輝
六十年	秀島 裕、滝口 悟、松田信久、山口宏明		六十一 年	六十二 年	六十三 年
	長谷川敦、岩崎慶治、新垣 修、竹林孝行、古賀英之、山口己智、山口宏明		秀島 裕、滝口 悟、松田信久、山口宏明	熊谷好昭、飛松秀樹、渡辺英明、藤鷹英雄、工藤頼康、本間一義、古田勝久、辻 純一、早田 豊、那須一郎、橋本年弘、中口光一郎、向井一輝	佐藤嘉剛、吉岡宏志、小平啓介、天本文夫、菅原健介、小林 誉
六年	中西厚喜、福原 聰		六十二 年	六十三 年	六十四 年
	新藤久司、松岡隆志、今宮一隆、長谷川敦、岩崎慶治、新垣 修、竹林孝行、古賀英之、山口己智、山口宏明		吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	佐藤嘉剛、吉岡宏志、小平啓介、天本文夫、菅原健介、小林 誙	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次
七年	秀島 裕、滝口 悟、松田信久、山口宏明		七年	八年	九年
	長谷川敦、岩崎慶治、新垣 修、竹林孝行、古賀英之、山口己智、山口宏明		吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次
八年	開 聖樹、太田 薫、木村芳徳、石丸純二、赤井沢一晴		八年	九年	十年
	園田隆二、山崎浩一、河原龍秀、開 聖樹、太田 薫、木村芳徳、石丸純二、赤井沢一晴		吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次
九年	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次		九年	十年	十一年
	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次		吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次
十年	芦 達也、阿武教子、榎 和寿、奥村俊樹、猿渡琢海、中野博之、花岡 亮、吉永喜史、三木隆二、池田 亮		十年	十一年	十二年
	芦 達也、阿武教子、榎 和寿、奥村俊樹、猿渡琢海、中野博之、花岡 亮、吉永喜史、三木隆二、池田 亮		吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次
十一年	中濱真吾、芳垣雅継、吉永富大、川口一生、野中一平、中富三紀夫、南波宏行、野寺真史、須磨重文		十一年	十二年	十三年
	中濱真吾、芳垣雅継、吉永富大、川口一生、野中一平、中富三紀夫、南波宏行、野寺真史、須磨重文		吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次
十二年	落合幸治、西野公明、増村一人、飯銅崇晋、松原 豊、松山雅之、宮本泰史、橋本悠司、鈴尾哲也、		十二年	十三年	十三年
	落合幸治、西野公明、増村一人、飯銅崇晋、松原 豊、松山雅之、宮本泰史、橋本悠司、鈴尾哲也、		吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次	吉田剛章、井上智和、山浦 俊、川本俊成、進藤庄次

平成七年	那川敏夫、中村裕次郎、姜 明寿
	十四年 棟田康幸、矢崎雄大、宮城充宏、沢田 彰、加藤主輔、坂本誠一、野中啓明、早川憲幸
	十五年 古賀崇裕、南陽大、杉田洋一、寺居高志、金谷允道、保立 勝
	(会友) 秋山桂一、平本禮司、宮内久雄
	駿柔会
	昭和三十三年 西村彰一郎
	三十五年 坏(あくつ) 昭二
	三十七年 柴田紀男、藤野好右
	三十八年 鈴木紀美、佐藤捷治
	四十年 見市卓哉
五十六年	四十一年 山田朝彦、片岡 清、小沢聖生、大胡東行
	四十二年 鈴木勝三、西久保博信
	四十三年 末広克利、加藤寛、清水 徹
	四十五年 長沢範英、大和田道夫
	四十七年 高崎孝司
	五十二年 小菅道雄
	五十六年 田中宏之
	五十七年 渡辺易彦、小林嘉文
	五十九年 芹沢敏光
	六十年 百瀬幸徳
代田隆之	平成七年 代田隆之

マスコミの見た明柔

柔道新聞創刊の頃

徳田 浩
(柔道新聞社)

太平洋戦争終了早々、占領軍は学校柔道を禁止した。しかし、柔道をこよなく愛する人たちの熱心な請願で昭和二十五(一九五〇)年九月に民主的スポーツとして復活が認められ、戦後の大学柔道が一気に開花することになる。東京学生優勝大会、全日本学生優勝大会がスタートしたのは昭和二十七年。「柔道新聞」はその年の三月に創刊し、当時の学生柔道界を克明に伝えていた。両大会とも明治が三連覇を果たすなど、その頃の大学柔道、というより日本柔道全体が明治を中心いていたといつても過言ではなかった。紙面は毎号のように「明治」の大きな活字が躍り続けた。その活況を当時の紙面で振り返ってみたい。創刊第二号(三月二十日号)で早くも明治柔道部を大きく取り上げている。

「私学の雄・明大は柔道部においても戦前から幾たびか覇を唱え、多くの俊英逸材を雲の如くに送りだしている。学校柔道を禁止された時期も、レスリングに名を借りて町道場で選手を養成していた。OBたちはヤミ米やさつま芋などを入手し選手に食べさせるなど、筆舌に尽くすことの出来ない苦労

を続けていた。昨年(昭和二十六年)、戦後第一回全国学生選手権では、第一位から三位を独占。一位の金子泰興五段は今春富士製鉄に入り、二位の大野忠博四段は主将曾根康治を助けて副将格、三位の末永茂四段も金子と共に学窓を巣立つた。卒業する神田和夫五段は警視庁幹候生隊、小野寺文男四段は名古屋の某商事会社、池田昭二三段はNHK入りがそれぞれ決まっている。

これらの強豪が揃って卒業するが、本年度の陣容は柔道部長出口林次郎六段、監督葉山七郎七段、助監督久米勝六段、師範姿節雄七段の下に、精銳が揃つて依然として不動の地位を確保している。曾根康治四段を主将に大野忠博、門屋賢吾、末木茂、神田和夫、山尾英三、河辺一彦各四段、新入生の石橋毅次郎四段は昨年の東西対抗で西軍先鋒を務めた猛者だ。三段陣には永井藤成、山田浩三、伊藤菊三、菊川俊雄、渡辺政雄、渡辺欣嗣、黄世鎮の新進に、東洋商業より高沢昭夫三段が加わつて威力を増している。二段はマネージャー須藤重男、三宅秀男、井沢清、工藤欣一、小林久繁、岩崎勇、押切義春、安藤健三の俊英に、八代高の松岡義隆、鹿児島工の重信定夫、須坂高の小林昇、京華高の辰野一雄、自由が丘高の平田博、都農林の高崎勇作、呉高の桑田武司、文京高の平井彪など多くの新鋭が約束されている。本校地下青畠五十枚の道場には、正面に三船十段の「奥妙存練心」の書を掲げ、春休み中にもかかわらず約四十名の新進古豪が息詰まるような猛練習に明け暮れていた。部員約百五十名、この豊富にして賢固な陣容は今年も一段と覇気と精彩を加えるだろう」。

この年、明治は当然のように第二回東京学生及び全日本学生優勝大会を失点の圧勝で飾った。東京大会は東大に七一〇、慶應に五一〇、日大に六一〇。全日本は愛知大に七一〇、法政に七一〇、中央に五一〇、日大に七一〇。圧巻は秋の東西学生対抗戦だった。気鋭の渡辺欣嗣、岩崎勇、河辺一彦の三人で西軍十七名を抜き、「明治の七選手だけで西軍三十選手に勝つだろう」